

幸福のうわおいぐつ

LYKKENS KALOSKER

ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

青空文庫

一 お話のはじまり

コペンハーゲンで、その東通の、王立新市場からとくくない一軒の家は、たいそうおおぜいのお客でにぎわっていました。人と人とおつきあいでは、ときおりこちらからお客をしておけば、そのうち、こちらもお客によばれるといったものでしてね。お客の半分はとうにカルタ卓^{つくえ}にむかっていました。あとの半分は、主人役の奥さんから、今しがた出た、

「さあ、こんどはなにがはじまりしましょうね。」というごあいさつが、どんな結果になってあらわれるかと、手ぐすねひいて、

待っているのです。もうずいぶんお客さま同士の話がはずむだけはずんでいました。そういう話のなかには、中世紀時代の話でもありました。あるひとりは、あの時代は今の時代にくらべては、くらべものにならないほどよかったと主張しました。じつさい司法^{しほうさ}参事官^{んじかん}のクナツプ氏などは、この主^{しゅ}張^{うちよう}にとっても熱心で、さつそく主人役の奥さんを身方につけてしまったほどでした。そうしてこのふたりは*エールステッドが年報誌上にかいた古近代論の、現代びいきな説にたいして、やかましい攻撃をはじめかけたくらいです。司法参事官の説にしたがえば、デンマルクの**ハンス王時代といえ、人間はじまって以来、いちばんりっぱな、幸福な時代であつたというのでした。



*デンマルクの名高い物理学者（一七七七—一八五一）。

*ヨハン二世（一四八一—一五一三）。選挙侯エルンスト・フォン・ザクセンのむすめクリスティーネと婚。ノルウェイ・スエーデン王を兼ねた。

さて会話は、こんなことで、賛否さんびこもごも花が咲いて、あいだに配達配達の夕刊がとどいたので、ちよつと話がとぎれたぐらいのことでした。でも、新聞にはべつだんおもしろいこともありますでしたから、話はそれなりまたつづきました。で、わたしたちはちよつと表の控間へはいつてみましょう。そこにはがいうと、つえと、かさと、くつの上にはうわおいぐつが一いっそく足置いてあり

ました。みるとふたりの婦人が卓つくえのまえにすわっていました。ひとりはまだ若い婦人ですが、ひとりは年をとっていました。ちよつとみると、お客のなかのお年よりのお嬢さん、または未亡人びぼうじんの奥さんのお迎えに来て、待っている女中かとおもうでしょう。でもよくみると、ふたりとも、ただの女中などでないということばかりしました。それにはふたりともきやしやすぎる手をしていましたし、ようすでも、ものごしでも、りっぱすぎ었지만、着物のしたて方にしても、ずいぶんかわっていました。ほんとうは、このふたりは妖女ようじよだったのです。若いほうは幸福の女神で、こそありませんが、そのおそばづかえのそのまた召使のひとりで、ちよいとしたちいさな幸福のおくりものをはこぶ役をつとめてい

るのです。年をとったほうは、だいぶむずかしい顔をしていました。これは心配の妖女でした。このほうはいつもごじしん堂堂どうどうと、どこへでも乗り込んでいつてしごとをします。すると、やはりそれがいちばんうまくいくことを知っていました。

ふたりはおたがいに、きょうどこでなにをして来たか話し合っていました。幸福の女神のおそばづかえのそのまた召使は、ほんのふたつ三つごくつまらないことをして来ました。たとえば買立の帽子が夕立にあうところを助けてやったり、ある正直な男に無名の篤志家とくしかからほどこし物をもらってやったり、まあそんなことでした。しかし、そのあとで、もうひとつ、話しのこしていたことは、いくらかかわったことであつたのです。

「まあついでだからいいですがね。」と、幸福のおそばづかえのそのまた召使は話しました。「きようはわたしの誕生たんじょうび日なのですよ。それでそのお祝いに、ご主人からうわおいぐつを一いっそく足あずけられました。そしてそれを人間のなかまにやってくれということです。そのうわおいぐつにはひとつの徳とくがあつて、それをはいたものはたちまち、だれでもじぶんがいちばん住んでみたいとおもう時代なり場所なりへ、はこんで行ってもらえて、その時代なり場所なりについて、のぞんでいたことがさつそくにかなうのです。そういうわけで、人間もどうやら、この世の中ながら幸福になれるでしょう。」

こういうと心配の妖女ようじょが、

「いや、お待ちなさいよ。そのうわおいぐつをはいた人は、きつとずいぶんふしあわせになるでしょうよ。そしてまた、はやくそれをぬぎたいとあせるようになるでしょうよ。」といいました。

「まあそこまではおもわなくても。」と、もうひとりがふふらしくいいました。「さあ、それでは幸福のうわおいぐつを、この戸口におきますよ。だれかがまちがってひっかけていつて、いやでも、すぐと幸福な人間になるでしょう。」

どうです。これがふたりの女の話でした。

二 参事官はどうしたか

もうだいぶ夜がふけていました。司法参事官しほうさんじクナツプ氏は、ハンス王時代のことに関心をとられながら、うちへかえろうとしました。ところで運命の神さまは、この人がじぶんのとまちがえて、幸福のうわおいぐつをはくように取りはからってしまいました。そこで参事官がなんの気なしにそれをはいたまま東通へ出ますと、もうすぐと、うわおいぐつの効能があらわれて、クナツプ氏はたちまち三百五十年前のハンス王時代にまでひきもとされてしまいました。さっそくに参事官は往来のぬかるみのなかへ、両足つつ

こんでしまいました。なぜならその時代はもちろん昔のこと、石をしいた歩道なんて、ひとつだつてあるはずがないのです。

「やれやれ、これはえらいぞ、いやはや、なんというきたない町だ。」と参事官がいました。「どうして歩道をみんな、なくしてしまったのだろう。街灯^{がいとう}をみんな消してしまったのだろう。」

月はまだそう高くはのぼっていませんでしたし、おまけに空気はかなり重たくて、なんということなしに、そこらの物がくらやみのなかへとろけ出しているようにおもわれました。次の横町の角^{かど}には、うすぐらい灯明がひとつ、聖母のお像のまえにさがっていましたが、そのあかりはまるでないのも同様でした。すぐその下にたつて、仰いでみてやつと、聖母と神子^{しんじ}の彩色した像が分か



るくらいでした。

「これはきつと美術品を売る家なのだな。日がくれたのに看板をひっこめるを忘れているのだ。」と、参事官はおもいました。

むかしの服装をした人がふたり、すぐそばを通っていきました。「おや、なんというふうをしているのだ。仮装舞踏会かそうぶとうかいからかえ

って来た人たちかな。」と、参事官は、ひとりごとをいいました。

ふとだしぬけに、太鼓と笛の音ねがきこえて、たいまつがあかあかがやき出しました。参事官はびっくりしてたちどまりますと、そのとき奇妙な行列が鼻のさきを通っていきました。まつさきには鼓手の一隊が、いかにもおもしろそうに太鼓を打ちながら進んで来ました。そのあとには、長い弓と石弓をかついだ随兵ずいひょうが

つづきました。この行列のなかでいちばんえらそうな人は坊さんの殿様でした。びつくりした参事官は、いったいこれはいつごろの風をしているので、このすいきょうらしい仮装行列をやつてあ
るく人はたれなのだろう、といつて、行列のなかの人にたずねま
した。

「シエランの大僧そうじょう正さまです。」と、たれかがこたえました。

「大僧正のおもいつきだと、とんでもないことだ。」と、参事官
はため息をついてあたまを振りました。そんな大僧正なんてある
ものか。ひとりで不服をとえながら、右も左もみかえらずに、
参事官はずんずん東通をとおりぬけて、高橋たかはしひろば広場にでました。
ところが宮城広場へ出る大きな橋がみつかりません。やつとあさ

い小川をみつけてその岸に出ました。そのうち小舟にのつてやつて来るふたりの船頭らしい若者にであいました。

^{ホルメン}「島へ渡りなさるのかな。」と、船頭はいいました。

^{ホルメン}「島へ渡るかって。」と、参事官はおうむ返しにこたえました。
なにしろ、この人はまた、じぶんが今、いつの時代に居るのか、はつきり知らなかったのです。

「わたしは、クリステイアンス　ハウンから小市場通へいくのだよ。」

こういうと、こんどはむこうがおどろいて顔をみました。

「ぜんたい橋はどこになっているのだ。」と参事官はいいました。
「第一ここにあかりをつけておかないなんてけしからんじやない

か。それにこのへんはまるで沼の中をあるくようなひどいぬかるみだな。」

こんなふうに話しても、話せば話すほど船頭にはよけいわからなくなりました。

「どうもおまえたちの＊ボルンホルムことばは、さっぱりわからんぞ。」と、参事官はかんしゃくをおこしてどなりつけました。そして背中をむけてどんどんあるきだしました。

＊バルティック海上の島。島の方言がかわっていた。

しかしいくらあるいても、参事は橋をみつけることはできませんでした。らんかんらしいものはまるでありませんでした。

「どうもこのへんは実にひどい所だ。」と、参事官はいいました。

じぶんのいる時代を、この晩ほどなさけなくおもったことはありませんでした。「まあこのぶんでは、辻馬車をやとうのがいちばんよさそうだ。」と、参事官はおもいました。そういつたところで、さて、どこにその辻馬車があるでしょうか。それは一台だつてみあたりそうにはありませんでした。

「これではやはり、王立新市場までもどるほうがいいだろう。あそこならたくさん馬車も来ているだろう。そうでもないかと、とてもクリステイアンス　ハウンまでかえることなどできそうもない。」

そこで、またもどつて、東通のほうへあるきだしました。そしてほとんどそこを通りぬけようとしたときに、たかだかと月がの

ぼりました。

「おや、なんとおもつて足場みたいなものをここに建てたのだ。」

東門をみつけて、参事官はこうさげびました。そのころ東通のはずれに、門があつたのです。

とにかく、出口をさがして、そこをとおりぬけると、今の王立新市場のある通へでました。けれどそれはただのただつ広い草原でした。二三軒みすばらしいオランダ船の船員のとまる下宿の木き小屋ごやが、そのむこう岸に建っていて、オランダッ原ぼらともよばれていた所です。

「おれはしんきろうをみているのか知らん。それとも酔っぱらっているのじゃないか知ら。」と、参事は泣き声をだしました。

「とにかくありやあなんだ。」

もうどうしても、病氣にかかっているにちがいない、そうおもい込んで、また引つかえました。往来をとぼとぼあるきあるき、なおよくそこの家のようすをみると、たいていの家は木組の小屋で、なかにはわら屋根の家もありました。

「いや、どうもへんな気分でしょうがない。」と、参事官はため息をつきました。「しかしおれは、ほんの一杯ポンスを飲んだだけだが、それがうまくおさまらないとみえる。それに、時候はずれのむしぎけをだしたりなんかして、まったくいあわせがわるかった。もういちどもどっていつて、主人の代理公使夫人に小言こごことをいつて来ようかしらん。いや、それもばからしいようだ。それ

にまだ起きているかどうかわからない。」

そういいながら、その家の方角をさがしましたが、どうしてもみつかりませんでした。

「どうもひどいことだ。東通がまるでわからなくなった。一軒の店もみえはしない。みすばらしいたおれかけの小屋がみえるだけだ。これではまるでリヨースキレか、リンステッドへでもいったようだ。ああ、おれは病気だぞ。遠慮をしているところでない。だが、いったい代理公使の家はどこなんだろう。どうしてももうもとはちがつている。しかもなかには人がまだ起きている。――どうしてもおれは病気だ。」

そのとき参事官は、一軒戸のあいている家の前へ出ました。す

きまからあかりが往来へさしていました。これはそのころの安宿で、半分居酒屋のようなものでした。ところで、そのなかはホルシユタイン風の百姓家の台所といったていさいでした。なかにはおおぜいの人間が、船乗や、コペンハーゲンの町人や二三人の本^{ほん}読^{よみ}もまじって、みんなビールのジョッキをひかえて、むちゅうになつてしゃべっていて、はいつて来た客にはいつこう気がつかないようでした。

参事官はお客をむかえにたつたおかみさんにいいました。「お気のどくですが、わたしは非常にぐあいがわるいのです。クリステイアンスハウンまで、辻馬車をやとつてはもらえませんか。」

おかみさんは、参事官の顔をうさんらしくみて首をふりました。

それからドイツ語で話しかけました。参事官はそれで、おかみさんがデンマルク語を知らないことがわかったので、こんどはドイツ語で同じ註文をくり返しました。その言葉と服装から、おかみさんは、この客をてつきり外国人だとおもひ込みました。で、氣分のわるそうなようすをみると、さつそく水をジョッキに一杯ついでもつて来ました。水はなんだかしょっぱいへんな味がしました。そのくせ外の噴井戸ふきいどから汲んで来たのです。

参事官は両手であたまをおさえて、ふかいためいきをつきながら、いまし方つづいておこつた奇妙なことを、あれこれとおもひめぐらしていました。

「それはきょうの＊『ダーエン』ですか。」と、参事官は、おか

みさんがもっていきかけた大きな紙をみて、ほんのおせじにききました。

*コペンハーゲン発行の夕刊新聞。一八〇五―四三。

お上さんは、なにを客がいうのだからわかりませんでしたから、だまってその紙を渡しました。それはむかし、キヨルンの町にあられたふしぎな空中現象げんしょうをかい一枚の木版刷もくはんずりでした。

「こりやなかなか古い。」と参事官は、あंगाいな掘り出しもので、おおきに愉快になりました。

「おまえさん、このめずらしい刷物すりものをどうして手に入れたのだね。こりやなかなかおもしろいものだよ。もつとも話はまるつきりおとぎばなしだがね。今日では、これに類した空中現象は、北

極光をみあやまったものだということになつてゐる。おそらく電気の作用でおこるものらしい。」

すると参事官のすぐそばにすわつて、この話をきいた人たちが、びつくりしてその顔をながめました。そして、そのうちのひとり、たち上がつて、うやうやしく帽子をぬいで、ひどくしかつめらしく「先生、どうも、あなたはたいそうな学者でおいでになりますな。」といいました。

「いやはや、どういたしまして。」と、参事官は答えました。

「ついだれでも知っているはずのことをふたことみこと、お話しただけですよ。」

「けんそんは美德で。」とその男はラテン語まじりにいいました。

「もつともお説にたいして、わたくしは異説をさしはさむものがあります。しかしながら、わたくしの批判はしばらく保留いたしましょう。」

「失礼ながら、あなたはどなたですか。」と、参事官がたずねました。

「わたくしは聖書得業士です。」と、その男が答えました。

その答で参事官は十分でした。その人の称号と服装はそれによくつりあっていました。多分、これは村の老先生というやつにちがいない。よくユラン（ユットランド）地方でみかけるかわりものだと参事官はおもいました。

「ここはいかにも学者清談の郷ではありませんな。」と、その男

はつづけていいでした。「しかしどうかまげてお話しください。あなたはむろん、古書はふかくご渉しょうりょう 獵りょうでしような。」

「はい、はい、それはな。」と、参事官は受けて、「わたしも有益な古書を読むことは大好きですが、とうせつの本もずいぶん読みます。ただ困るのは『その日、その日の話』というやつで、わざわざ本でよまないでも、毎日のことで飽き飽きしますよ。」

「『その日、その日の話』といいますと。」と、得業士はふしんそうにききました。

「いや、わたしというのは、このごろはやる新作の小説のことですよ。」

「ははあ。」と、得業士はにつこりしながら、「あれもなかなか

気のきいたものでして、宮中ではずいぶん読まれていますよ。＊
王様はとりわけ、アーサー王と円卓^{えんたく}の騎士の話を書いた、イフ
ヴェンとゴードイアンの物語を好いていられます。それでご家来
の人達とあの話をして興^{きよう}がつていられます。」

＊デンマルクの詩人ホルベルのデンマルク国史物語に、
ハンス王が寵臣のオットー ルードとアーサー王君臣
の交りについてとんち問答した話がかいてある。なお、
「その日その日の物語」は、文士ハイベルの母のかき
のこした身の上話。

「それはまだ読んでいません。」と、参事官はいいました。「ハ
イベルが出した新刊の本にちがいありませんね。」

「いや、ハイベルではありません。ゴットフレト フォン ゲーメンが出したのです。」と、学士は答えました。

「へへえ、その人は作者ですか。」と、参事官がたずねました。
「ゴットフレト フォン ゲーメンといえば、すいぶん古い名まえですね。あれはなんでも、ハンス王時代、デンマルクで印刷業をはじめた人ではありませんか。」

「そうですとも。この国でははじめての印刷屋さんですよ。」と、学士が答えました。

ここまではどうにかうまくいきました。こんどは町人のひとりが、三年まえ流行した伝染病の話をしました。ただそれは一四八四年の話でした。参事官はそれを一八三〇年代はやったコレ

ラの話をしているのだとおもいました。そこで会話は、どうにか
つじつまが あいました。一四九〇年の海賊戦争もつい近頃のこと
でしたから、これも話題にのぼらずに いませんでした。で、イギ
リスの海賊船が、やはり同じ波止場か船をりやくだつていった、
とその男は話しました。ところで、*一八〇一年の事件をよく知
っている参事官は、進んでその話に調子をあわせて、イギリス人
に攻撃をしかけました。これだけはまずよかったが、そのあとの
話はそううまくばつが あいませんでした。ひとつひとつに話があ
いがありました。学士先生は気のどくなほども知りませんで
した。参事官のごくかるく口にしたことまでが、いかにもでたら
めな、気持ちが いじみた話にきこえました。そうすると、ふたりは

だまって顔ばかりみあわせました。いよいよいけないとなると、学士はいくらか相手にわからせることができるかとおもって、ラテン語で話しましたけれど、いっこう役には立ちませんでした。

＊一八〇一年四月二日英艦の攻撃事件。

「あなた、ご気分はどうですね。」と、おかみさんはいつて、参事官のそでをひっぱりました。

ここではじめて、参事官はわれにかえりました。話でむちゅうになっていいるあいだは、これまでのことをいつさい忘れていたのです。

「やあ、たいへん、わたしはどこにいたのだ。」と、参事官はいつて、それをおもいだしたとたん、くらくらとなったようでした。

「さあ、クラレットをやろうよ。蜜酒に、ブレーメン・ビールだ。
。」と、客のひとりがさけびました。

「どうです、いっしょにやりたまえ。」

ふたりの給仕のむすめがはいって来ました。そのひとりは*ふた色の染分け帽子をかぶって来ました。ふたりはお酒をついでまわって、おじぎをしました。参事官はからだじゅうぞつとさむけがするようにおもいました。

*ハンス王時代下等な酌女 of のしるし。

「やあ、こりやなんだ。こりやなんだ。」と、参事官はさけびました。けれども、いやでもいっしょに飲まなければなりませんでした。客どもはごくたくみにこの紳士しんしをあつかいました。参事官

はがっかりしきっていました。たれか、「あの男酔っぱらっているよ。」といったものがありました。そのことばをうそだとおこるどころではありません。どうぞ、ドロシユケ（辻馬車）を一台たのむといったのが精いっぱいでした。ところがみんなはそれをロシア語でも話しているのかとおもいました。

参事官は、これまでこんな下等な乱暴ななまにはいったことはありませんでした。

「これではまるで、デンマルクの国が、異教国の昔にかえったようだ。こんなおそろしい目にあつたことははじめてだぞ。」と、参事官はおもいました。しかしそのときふとおもいついて、参事官はテーブルの下にもぐりこんで、そこから戸口の所まではい出

そうとしました。そのとおりうまくやって、ちょうど出口までいったところを、ほかの者にみつけれました。みんなは参事官の足をとって引きもどしました。そのとき大仕合わせなことには、うわおおいぐつがすつぽりぬけました。——それでいっさいの魔法が消えてなくなりました。

そのとき参事官ははつきりと、すぐ目のまえに、街灯がひとつ、かんかんともっていて、そのうしろに大きな建物の立っているのをみつけました。そこらじゅうみまわしても、おなじみのあるものばかりでした。それは、今の世の中で毎日みているとおりの東通でした。参事官は玄関の戸に足をむけて腹ンばいになっていたのです。すぐむこうには町の夜番が、すわって寝込んでいました。

「やあたひへん、おれは往来で寝て、夢をみていたのか。」と、参事官はさげびました。「なるほど、これは東通だわい。どうもなにかが、かんかんあかるくって、にぎやかだな。それにしてもいっぱいのポンスのききめはじつにおそろしい。」

それから二分ののち参事官は、ゆうゆうと辻馬車のなかにすわって、クリステイアンスハウンのじぶんの家のほうへはこばれていきました。参事官はいましたがたさんざんおそろしい目や心配な目にあつたことをおもいだすと、今の世の中には、それはいろいろわるいことはあつても、ついさつきもつていかれた昔の時代よりはずっとましだということをしりました。どうです、参事官は、もののわかつたひとでしょう。

三 夜番のぼうけん

「おやおや、あすこにうわおいぐつが一足ころがっている。」と夜番はいいました。「きつとむこうの二階にいる中尉さんの物にちがいない。すぐ門口にころがっているから。」

正直な夜番は、ベルをならして、うわおいぐつを持主にわたそうとおもいました。二階にはまだあかりがついていました。けれど、うちのなかのほかの人たちまでおどろかすのも気のどくだとおもったので、そのままにしておきました。

「だが、こういうものをはいたら、ずいぶん温かいだろうな。」

と、夜番はひとりごとをいいました。「なんて上等なやわらかい革がつかつてあるのだろう。」うわおいぐつはぴったり夜番の足にあいました。「どうも、世の中はおかしなものだ。いまごろ中尉さんは、あの温かい寝床のなかで横になっていればいられるはずなのだ。ところが、そうでない。へやのなかをいったり来たり、あるいている。ありやしあわせなお人さな。おかみさんもこどももなく、毎晩、夜会にでかけていく。おれがあの人だったらずいぶんしあわせな人間だろうな。」

夜番がこういつて、こころのねがいを口にだしますと、はいていたうわおいぐつはみるみる効能をあらわして、夜番のたましいはするすると中尉のからだとこころのなかへ運んで持っていかれ



ました。

そこで夜番は、二階のへやにはいつて、ちいさなばら色の紙を指のまたにはさんで持ちました。それには詩が、中尉君自作の詩が書いてありました。それはどんな人だつて、一生にいちどは心のなかを歌にうたいたい気持ちになるおりがあるもので、そういうとき、おもったとおりを紙に書けば、詩になります。そこで紙にこう書いてありました。

「ああ、金持でありたいな。」

「ああ、金持でありたいな。」おれはたびたびそうおもつ

た。

やつと二尺のがきるとき、おれはいろんな望をおこした。

ああ、金持でありたいな——そうして士官になろうとした、
サーベルさげて、軍服すがたに、負^{おいかわ}革かけて。

時節がくると、おれも士官になりました。

さてはや、いっこう金^{かね}はできない。なさけないやつ。

全能の神さま、お助けください。

ある晩、元気で浮かれていると、

ちいさい女の子がキスしてくれた、

おとぎ歌なら、持ちあわせは山ほど、

そのくせ金にはいつでも貧乏――

こどもは歌さえあればかまわぬ。

歌なら、山ほど、金には、いつもなさけないやつ。

全能の神さま、ごらんのとおり。

「ああ、金持でありたいな。」おいのりがこうきこえだす。

こどもはみるみるむすめになった、

りこうで、きれいで、心もやさしいむすめになった。

ああ、分らせたい、おれの心のうちにある――

それこそ大したおとぎ話を――むすめがやさしい心を見せりや。

だが金はなし、口には出せぬ。なさけないやつ。

全能の神さま、おこころしだいに。

ああ、せめてかわりに、休息と慰^{なぐさめ}安、それでもほしい。

そうすりやなにも心の悩み、紙にかくにもあたらない。

おれの心をささげたおまえだ、わかつてくれよ。

若いおもしろい出つづつた歌だ、読んでもくれよ。

だめだ、やつぱりこのままくらい夜^{よる}にささげてしまいがましか。

未来はやみだ、いやはやなさけないやつめ。

全能の神さま、おめぐみください。

そうです、人は恋をしているときこんな詩をつくります。でも用心ぶかい人は、そんなものを印刷したりしないものです。中尉と恋と貧乏、これが三角の形です。それとも幸福のさいころのこわれた半かけとでもいいいきましょうか。それを中尉はつくづくおもっていました。そこで、窓わくにあたまをおしつけて、ふかいため息ばかりついていました。

「あすこの往来にねている貧しい夜番のほうか、おれよりはずつと幸福だ。あの男にはおれのおもっているような不足というものが無い。家もあり、かみさんもあり、こどももあつて、あの男のかなしいことには泣いてくれ、うれしいことには喜んでくれる。」

ああ、おれはいつそあの男と代ることができたら、今よりずっと幸福になれるのだから。あの男はおれよりずっと幸福なのだからな。」

中尉がこうひとりごとをいうと、そのしゅんかん、夜番はまたもとの夜番になりました。なぜなら幸福のうわおいぐつのおかげで、夜番のたましいは中尉のからだを借りたのですけれど、その中尉は、夜番よりもいつそう不平家で、おれはもとの夜番になりたいとのぞんだのでした。そこで、そのおのぞみどおり、夜番はまた夜番になってしまったのです。

「いやな夢だった。」と、夜番はいいました。「が、ずいぶんばかばかしかった。おれはむこう二階の中尉さんになったようにお

もったが、まるで愉快でもなんでもなかった。息のつまるほどはおずりしようとかまえていてくれる、かみさんやこどものいることを忘れてなるものか。」

夜番はまたすわって、こくりこくりやっていました。夢がまだはつきりはなれずにいました。うわおいぐつはまだ足にはまつていました。そのとき流れ星がひとつ、空をすべって落ちました。

「ほう、星がとんだ。」と、夜番はいいました。「だが、いくらとんでも、あとにはたくさん星がのこっている。どうかして、もう少し星のそばによつてみたいものだ。とりわけ月の正体をみたいものだ。あれだけはどんなことがあつても、ただの星とちがつて、手の下からすべって消えていくということはないからな。

うちのかみさんがせんたく物をしてやっている学生の話では、おれたちは死ぬと、星から星へとぶのだそうだ。それはうそだが、しかしずいぶんおもしろい話だとおもう。どうかしておれも星の世界までちよいととんでいくくふうはないかしら、すると、からだぐらいはこの段段のうえにのこしていてもいい。」

ところで、この世の中には、おたがい口にだしていうことをつつしまなければならないことがずいぶんあるものです。取りわけ足に幸福のうわおいぐつなんかはいているときは、たれだつて、よけい注意がかんじんです。まあそのとき、夜番の身の上に、どんなことがおこつたとおもいますか。

たれしも知っている限りでは、蒸気の物をはこぶ力の早いこと

はわかつています。それは鉄道でもためしてみたことだし、海上を汽船でとおつてみてもわかります。ところが蒸気の速力などは、光がはこぶ早さにくらべれば、なまけもののがのそのそ歩いているか、かたつむりがむずむずはっているようなものです。それは第一流の競走者の千九百万倍もはやく走ります。電気となるともつと早いのです。死ぬというのは電気で心臓を撃たれることなので、その電気のつばさにのつて、からだをはなれた魂はとんで行きます。太陽の光は、二千万マイル以上の旅を、八分と二、三秒ですませてしまいます。ところで電気の早飛脚はやびきやくによれば、たましいは、太陽と同じ道のりを、もつと少い時間でとんでいってしまいます。天体と天体とのあいだを往きかいするのは、同じ町

のなかで知っている同士が、いやもつと近く、ついお隣同士が往きかいするのと大してちがったことではありません。でも、この下界では心臓を電気にうたれると、からだがはたらかなくなる危険があります。ただこの夜番のように、幸福のうわおいぐつをはいているときだけは、べつでした。

なん秒かで、夜番は五万二千マイルの道をいって、月の世界までとびました。それは、地の上の世界とはちがった、ずっと軽い材料でできていました。そしていわば降りだしたばかりの雪のようにふわふわしています。夜番は例の＊メードレル博士の月世界大地図で、あなた方もおなじみの、かずしれず環わなりに取りまわした山のひとつにくだりました。山が輪になってめぐっている内

がわに、切っ立てになつたはち形のくぼみが、なんマイルもふかく掘れていました。その堀の底に町があつて、そのようすはちよつというと、卵の白味を、水を入れたコップに落したというおもむきですが、いかにも、さわってみると、まるで卵の白味のように、ぶよぶよやわらかで、人間の世界と同じような塔や、円屋根のお堂や、帆のかたちした露台ろだいが、薄い空のなかに、すきとおつて浮いていました。さて人間の住む地球は、大きな赤黒い火の玉のように、あたまの上の空にぶら下がっていました。

*ドイツの天文学者

夜番はまもなく、たくさんの生きものにであいました。それはたぶん月の世界の「人間」なのでしようが、そのようすはわたし

たちとはすっかりちがっていました。（**^{にせ}偽ヘルシエルが、作り出したものよりも、ずっとたしかな想像でこしらえられていて、一列にならばせて、画にかいたら、こりやあうつくしいアラビヤ模様だというでしょう。）この人たちもやはり言葉を話しましたが、夜番のたましいにそれがわかろうとは、たれだっておもわなかったでしょう。（ところがそれが、わかったのだからふしぎですが、人間のたましいには、おもいの外の働きがあるのです。そのびっくりするような芝居めいた才能は、夢の中でもはたらくとおりでしょう。そこでは知合のたれかれがでて来て、いかにもその気性をあらわした、めいめい特^{とく}有^{ゆう}の声で話します。それは目がさめてのちまねようにもまねられないものです。どうしてたま

しいは、もうなん年もおもいだしもしずにいた人たちを、わたしたちの所へつれてくるのでしよう。それは、わたしたちのたましいのなかへ、いきなりと、ごくこまかくせまでももってあらわれてきます。まったく、わたしたちのたましいのもつ記憶はおそろしいようですね。それはどんな罪でも、どんなわるいかんがえでも、そのままあらわしてみせます。こうなると、わたしたちの心にうかんで、くちびるにのぼったかぎりの、どんなくだらない言葉でも、そののこらずの明細がきができそうなことです。―

＊＊ドイツで出版された月世界のうそ話。括弧内の文は原本になく、アメリカ版による。

そこで夜番のたましいは、月の世界の人たちの言葉をずいぶん

よくとききました。その人たちはこの地球の話をして、そこはいつたい人間が住めるところかしらとうたぐっていました。なんでも地球は空気が重たすぎて、感じのこまかい月の人にはとても住めまいといいはりました。その人たちは、月の世界だけに人間が住んでいるとおもっているのです。なぜなら、古くからの世界人が住んでいる、ほんとうの世界といたら、月のほかにはないというのです。（この人たちはまた政治の話もしていました。）それはそれとして、またもとの東通へくだって行って、そこに夜番のたましいがおき去りにして来たからだは、どうしたかみてみましょう。

夜番は、階段の上で息がなくなつてねていました。明星を

みようじよう

あたまにつけたやりは、手からころげ落ちて、その目はぼんやりと月の世界をながめていました。夜番のからだは、そのほうへあこがれてでていった正直なたましいのゆくえをながめていたのです。

「こら夜番、なん時か。」と、往来の男がたずねました。ところが返事のできない夜番でありました。そこでこの男は、ごく軽く夜番の鼻をつつきますと、夜番はからだの平均へいきんを失って、ながながと地びたにたおれて、死んでしまいました。鼻をつついた男は、びっくりしたのしらないではありません。夜番が死んだまま生きかえらないのです。さつそく知らせる、相談がはじまる、明くる朝、死体は病院にはこばれました。

ところで、月の世界へあそびにでかけたたましいが、そこへひよつこり帰つて来て、東通に残したからだを、ありったけの心あたりを探してみ、みつけなかったら、かなりおもしろいことになるでしょう。たぶんたましいはまず第一に警察へかけるでしょう。それから人事調査所へもいくでしょう。そしてなくなつた品物のゆくえについて捜索そうさくがはじまるでしょう。それから、やっと、病院までたずねていくことになるかも知れませんが、でも安心してよろしい。たましいはじぶんの身じんまくをするのは、この上なくきようです。まのぬけているのはからだです。

さて申し上げたとおり、夜番のからだは病院へはこばれました。そうして清潔室せいけつしつに入れられました。死体をきよめるについて、

もちろん第一にすることは、うわおいぐつをぬがせることでした。そこで、いやでもたましいはかえつてこないわけにはいきません。で、さつそくたましいはからだへもどつて来しました。すると、みるみる死骸に氣息いきがでて来しました。夜番は、これこそ一生に一どの恐しい夜であつたと白状しました。もうグロシエン銀貨なん枚もらつても、二どとこんなおもいはしたくないといいました。しかし今となれば、いつさい、すんだことでした。

その日、すぐと、夜番は、病院をでることをゆるされました。けれど、うわおいぐつは、それなり病院にのこつていました。

四 一大事 朗読会の番組 世にもめずらしい旅

コペンハーゲンに生まれたものなら、たれでもその町のフレデリク病院の入口がどんなようすか知っているはずです。でもこの話を読む人のなかには、コペンハーゲン生まれでない人もあるでしょうから、まずそれについて、かんたんなお話をしておかなくてはなりませんまい。

さて、その病院と往来とのあいだにはかなり高いさくがあつて、ふとい鉄の棒が、まあ、ずいぶんやせこけた志願助手でもあつたらむりにもぬけられそうな、というくらいまの間をおいて並んで

いました。それで、ここからぬけてちよつとしたそとの用事がたせるといふわけでした。ただからだのなかで、いちばんむずかしいのはあたまでした。そこでよくあるとおり、ここでも小あたまがなよりのしあわせということになるのでした。まずこのくらいで、前口上はたくさんでしょう。

さて、若いひとりの志願助手がありました。からだのことだけでいうと、大あたまの男でしたが、これが、ちようどその晩、宿しゆくちよく

直に当たっていました。雨もぎんぎん降っていました。しかし、このふたつのさわりにはかまわず、この人はぜひそとへでる用がありました。それもほんの十五分ばかりのことだ、門番にたのんで門をあけてもらうまでもなからう、ついさくをくぐってもでら



れそうだからとおもいました。ふとみると夜番のおいていったうわおいぐつがそこにありました。これが幸福のうわおいぐつであろうとはしりませんでした。こういう雨降りの日には、くつきよなものがあつたとおもつて、それをくつの上にはきました。ところで、はたしてさくはくぐる事ができるものかどうか、今までは、ついそれをためしてみたことがないので、そこでさくのまえにたちました、

「どうかあたまがそとにでますように。」と、助手はいいました。するとたちまち、いったいずいぶんのさいづちあたまなのが、わけなくすつぽりでました。そのくらい、うわぐつは心えていました。ところで、こんどはからだをださなければならぬのに、そ

こでぐつとつまってしまいました。

「こりや肥りすぎているわい。どうもあたまが一番始末がわるそうだとおもったのだが。でるのはだめか。」と、助手はいいました。

そこで、いそいであたまをひっこめようとなりました。けれども、うまくいきませんでした。どうやら動くのは首だけで、しかしそれきりでした。はじめはぷりぷりしてみました。そのうちがっかりして、零下^{れいか}何度のごきげんになってしまいました。幸福のうわおいぐつは、この人をこんななさけないめにあわせたのです。しかも、ふしあわせと、ああどうか自由になりたいとひとこということをおもいつかずにいました。そういう代りに、むやみとじれ

て、がたがたやりました、でもいつこう動けません。雨はしぶきをたててなされました。往来には人ツ子ひとり通りません。門のベルにはせいがとどきません。どうしてぬけだしましょう。こうなると、まずあしたの朝まで、そこにそのままたっているということになりそうです。そこで、みんながみつけてかじ屋呼びにやってくれて、鉄の格子こうしをやすりで切つてだすというところでしょう。だがそういうしごとは、ちよつくりはこぶものではありません。すぐまえの青建物の貧民学校から、総出でくる、すぐそばの海員地区からも、つながってくる、このお仕置台に首をはさまれている、さらし物の見物で、去年 竜舌蘭りゅうぜつらんの大輪が咲いたときのさわぎとはまたちがった、大へんな人ばかりになるでしょう。

「うう、苦しい。血があたまに上るようだ。おれは気がちがう。

——そうだ、もう気がちがいかけている。ああ、どうかして自由になりたい、それだけでもいいんだ。」

これはもう少し早くいえばよかったことでした。こうおもったとおり口にだしたとたん、あたまは自由になりました。幸福のうわおいぐつのおそろしいきき目にびつくりして、助手はむちゅうでうちへかけ込みました。

しかし、これでいっさいすんだとおもってはいけません。これからもつとたいへんなことになるのです。

その晩はそれですぐで、次の日も無事に暮れました。たれもうわおいぐつを取りにくるものはありませんでした。

その日の夕、カニヶ街の小さな朗読会の催しがあるはずでした。小屋はぎっしりつまっていました。朗読会の番組のなかに、新作の詩がありました。それをわたしたちもききましよう。さて、その題は、

おばあさんの目がね

ぼくのおばあちゃん、名代なだいのもの知り、

「昔の世」ならばさつそく火あぶり、

あつたことなら、なんでも知つて、

その上、来年のことまでわかつて、

四十年さきまでみとおしの神わざ、

そのくせ、それをいうのがきらい、

ねえ、来年はどうなりますか、

なにかかわったことでもないか、

お国の大事か、ぼくの身の上、

やつぱり、おばあちゃん、なんにもいわない、

それでもせがむと、おいおいごきげん、

はじめのがんばり、いつものとおりさ、

もうひと押しだ、かわいい孫だ、

ぼくのたのみをきかずにいようか。

「ではいっぺんならかなえてあげる」

やっと承知で目がねを貸した。

「さて、どこなりとおおぜいひとの
あつまるなかへでかけていって
ごったかえしを、目がねでのぞくと、
とたんに、それこそカルタの札の
うらないみたいに、なんでも分かる
さきのさきまで、手にとるように。」

おれいもそこそこ、みたいがさきで、
すぐかけだしたが、さてどこへいく。

ランケリニエ
長町通か、あそこはさむい、

エスデルガーデ
東 堤

か、ペツ、くされ沼

それでは、芝居か、こりやおもいつき、

出しものもよし——お客は大入。

——そこでまかり出た今夜の催し、

おぼばの目がねをまずこうかけて、

さあながめます——お逃げなさるな——

ほんに、皆さま、カルタの札で

未来のうらない、あたればなぐさみ——

ではよろしいか。ご返事ないのは承知のしるし。

さて、ご好意のお礼ごころに、

目がねでみたこと申しあげる。

では、皆さまの、じぶんのお国の、未来のひみつ、カルタのおもてに読みとります。

（目がねをかける）

ははん、なるほど、いや、わらわせる。

珍ちんみよう妙 ふしぎ、お目にかきたい。

カルタの殿方、ずらりとならんで、

お行儀のいい、ハートのご婦人。

そちらに黒いは、クラブにスピード

——ひと目にずんずん、ほら、みえてくる——

スピードの嬢ちやま、ダイヤのジャックに、

どうやらないしよのうち明け話で、

みているこつちが酔うよなありさま。

そちらはたいしたお金持そうな――

よその国からお客がたえない。

だが、つまらない――どうでもよいこと。

では、政治向。おまちなさいよ――新聞種しんぶんだねだ――

のちほどゆつくり読んだらわかるさ。

ここでしゃべると、業務の妨害、

晩のごはんのたのしみなくなる。

そんならお芝居――初演の新作。おこのみ流行。

いけない、これは――支配人とけんかだ。

そこでじぶんの身の上のこと、

たれしもこれが、いちばん気になる。

それはみえます——だがまあいえない、

いずれそのときにや、しぜんと分かる。

ここにはいるひと、たれがいちばんしあわせものか。

いちばんしあわせもの。そりやあ、まあ、わかります。

さようさ、それは——いや、まあ、ごえんりよ申しましよう。

こりやあ、がっかりなさる方がおかろう。

では、どなたがいちばん長生きなさるか、

こちらの殿方か、あちらの奥さまか、

いや、こんなこと申さば、なおさらごめいわく。

すると、これか——いや、だめだ——あれか——だめだな、さあ、あれもと——どうしていいか、さっぱりわからんなにしろ、どなたかのごきげんにさわります。

いつそ、皆さまのお心のなか、

それなら目がねも見とおしだ。

皆さん、かんがえていますね。いや、なにかのぞんでおいでかな。

くだらなすぎるといふように。

きさま、あんまりばかばかしいぞ、

くだらぬおしゃべりもうやめろ、

それが一致のごいけんならば

はいはいやめます、だまります。

この詩の朗読はなかなかりっぱなできで、演者は面目をほどこしました。見物のなかには、れいの病院の志願助手が、ゆうべの大事件はけろりと忘れたような顔をしてまじっていました。たれも取りにくるものがないので、うわおいぐつは相変らずはいたままでした。それになにしろ往来は道がひどいのでこれはとんだちようほうでした。

この詩を助手はおもしろいとおもいました。なによりもそのおもいつきが心をひきました。そういう目がねがあつたらさぞいい

だろう。じょうずにつかうと、その目がねで、ひとの心のなかをみとおすことができるわけだ。これは来年のことを今みるよりも、もつとおもしろいことだとかんがえました。なぜなら、さきのことはさきになれば分かるが、ひとの心なんてめつたに分かるものではないのです。

「そこで、おれはまずいちばんまえの紳士貴女諸君の列をながめることにする。——いきなり、あの人たちの胸のなかにとびこんだらどうだろう。まあ窓だな、店をひろげたようにいろいろな物がならんでいるだろう。どんなにおれの目は、その店のなかをきよろきよろすることだろう。きつと、あすこの奥さんの所は大きな小間物屋にはいったようだろう。こちらのほうはきつと店がか

らっぽだろう。だいぶそうじがとどかないな。だがたしかな品物をうる店だつてありそうなものだ。やれやれ。」と、助手はため息をつきながら、またかんがえつつづけました。「なんでもたしかな品ばかり売るといふ店があるのだから、そこにはあいにくもう店番がいる。それがきずき。こちらの店もあちらの店も「だんな、どうぞおはいりください」といいたそうだ。そこでかわいらしい「かんがえ」の精のようなものになって、あの人たちの胸のなかをのぞきまわつてみてやりたい。」

ほら、うわおいぐつにはもうこれだけで通じました。たちまち助手はからだがちぢくれ上がつて、一ばんまえがわの見物の心から心へ実にふしぎな旅行をはじめることになりました。まっさき

にはいつていったのは、ある奥さまの心で、整形外科せいけいげかの手術室にはいりこんだようにおもいました。これはお医者さまが、かたわな人のよぶんな肉を切りとつて、からだのかっこうをよくしてくれる所をいうのです。そのへやには、かたわな手足のギプス型が壁に立てかけてありました。ただちがうのは整形病院では、ギプス型を患者かんじやがはいつてくるたんびにとるのですが、この心のかでは、人がでていつたあとで型をとつて、保存されることでした。ここにあるのは女のお友だちの型で。そのからだと心の欠点けってんがそのままここに保存されていました。

すぐまた、ほかの女のなかにはいつていきました。しかし、これは大きな神神こうこうしいお寺のようにおもわれました。無垢むくの白は

とが、高い聖壇の上をとんでいました。よつほどひざをついて拝みたいとおもったくらいでした。しかし、すぐと次の心のなかにはいつていかなければなりませんでした。でも、まだオルガンの音がきこえていました。そうしてじぶんがまえよりもいい、別の人間になったようにおもわれました。いばつて次の聖堂にはいる資格が、できたように感じました。それは貧しい屋根裏のへやのかたちであらわれて、なかには病人のおかあさんがねていました。けれどあいた窓からは神さまのお日さまの光が温かくさしこみましたうつくしいばらの花が、屋根の上の小さな木箱のなかから、がてんがてんしていました。空色した二羽の小鳥が、こどもらしいよろこびのうたを歌っていました。そのなかで、病人のおかあ

さんは、むすめのために、神さまのおめぐみを祈っていました。

それから、肉でいっぱいだった肉屋の店を、四つんばいになつてはいあるきました。ここは肉ばかりでした。どこまでいっても、肉のほかなにもありませんでした。これはお金持のりっぱな紳士しんしの心でした。おそらく、この人の名まえは紳士録にのっているでしょう。

こんどはその紳士の奥さまの心のなかにはいりました。その心は、古い荒れはてたはと小屋でした。ごていしゆの像がほんの風か見さみのにわとり代りにつかわれていました。その風見は、小屋の戸にくつついていて、ごていしゆの風見がくるりくるりするとおりに、あいたりとじたりしました。

それからつぎには、ローゼンボルのお城でみるような鏡の間に
でました。でもこの鏡は、うそらしいほど大きくみせるようにで
きていました。床のまんなかには、達頼喇嘛ダライラマのように、その持主
のつまらない「わたし」が、じぶんでじぶんの家の大きいのにあ
きれながらすわっていました。

それからこんどは、針がいつぱいつんつんつたっている、せ
まい針箱のなかにはこばれました。これはきつと年をとつておよ
めにいけないむすめの心にちがいないとおもいました。けれど、
じつはそうではありません。たくさん勲章をぶら下げている若い
士官の心でした。しかし、世間ではこの人を才と情のかねそなわ
った人物だといっていました。

あわれな助手は、列のいちばんおしまいの人の中からぬけだしたとき、すっかりあたまがへんになっていて、まるでかんがえがまとまりませんでした。やたらとはげしいもうぞうが、じぶんといっしょにかけずりまわったのだとおもいました。

「やれやれ、おどろいた。」と、助手はため息をつきました。

「おれはどうも気持ちがいになるうまれつきらしい。それに、ここは、むやみと暑い。血があたまにのぼるわけさ。」

そこで、ふとゆうべの、病院の鉄さくにあたまをはさまれた大事件をおもいだしました。

「きつとあのととき病気にかかったにちがいない。」と、助手はおもいました。「すぐどうかしなければならぬ。ロシア風呂^{ぶろ}がき

くかも知れない。ならば一上等のたなにねたいものだ。」

するともう、さつそくに蒸風呂むしぶろのいちばん上のたなにねていま

した。ところで、着物を着たなり、長ぐつも、うわおいぐつもそ

のままですねていました。天井てんじょうからあついしずくが、ぽた、ぽ

た、顔に落ちて来ました。

「うわあ。」と、とんきようにさけんで、こんどは灌水浴かんすいよくをす

るつもりで下へおりました。

湯番は着物を着こんだ男がとびだしたのをみてびつくりして、

大きなさけび声をたてました。

でも、そういうなかで、助手は、湯番の耳に、

「なあにかけをしているのだよ。」と、ささやくだけの余裕よゆうがあ

りました。さて、へやにかえつてさつそくにしたことは、首にひとつ、背中にひとつ、大きなスペイン発泡膏はっぼうこうをはることでした。これでからだのなかの気ちがいじみた毒気を吸いとうろうというわけです。

明くる朝、助手は、赤ただれたせなかをしていました。これが幸福のうわおいぐつからさずけてもらった御利益ごりやくのいつさいでした。

五 書記の變化^{へんげ}

さて、わたしたちがまだ忘れずにいたあの夜番は、そのうち、じぶんがみつけて、病院までもはいていったうわおいぐつのことをおもいだしました。そこで、とつてかえりましたが、むこう二階の中尉にも、町のたれかれにきいても、持主は、わかりませんでしたから、警察へとどけました。

「これはわたしのうわおいぐつにそっくりだ。」と、この拾得^{しゅうとく}物^{くぶつ}をみた書記君のひとりがいつて、じぶんと並べてみました。「どうして、くつ屋でもこれをみわけるのはむずかしからう。」



「書記さん。」と、そのとき小使が書類をもつてはいって来ました。

書記はふりむいてその男と話をしていました。話がすむと、またうわおいぐつのほうへむかいましたが、もうそのときは、右か左かじぶんのがわからなくなつてしまいました。

「しめつてゐるほうがわたしのちがいない。」と、書記君はおもいました。でも、これはかんがえちがいでした。なぜなら、そのほうが幸福のうわおいぐつだったのです。だって警察のお役人だって、まちがわないとはかぎらないでしょう。で、すましてそれをはいて、書類をかくしにつっこみました。それからあとは小わきにかかえました。これを内へかえつて読んで、コピー（副本）

をつくらなければならぬのです。ところで、その日は日曜の朝で、いいお天気でした。ひとつ、フレデリクスベルグへでもぶらぶらでてみるかな、とかんがえて、そちらに足をむけました。

さて、この青年ぐらい、おとなしい、堅^{かたじん}人はめつたにありません。すこしばかりの散歩を、この人がするのは、さんせいですよ。ながく腰をかけ通していたあとで、きつとからだにいいでしょう。はじめのうち、この人もただぼかんとしてあるいていました。そこで、うわおいぐつも魔法をつかう機会がありませんでした。

公園の並木道^{なみきみち}にはいると、書記はふとお友だちの、若い詩人にであいました。詩人は、あしたから旅にでかけるところだと話

しました。

「じゃあ、もうでかけるのかい。」と、書記はうらやましそうにいいました。「なんて幸福な自由な身の上だろう。いつどこへでも、好きなところへとんでいけるのだ。われわれと来ては、足にくさりをつけられているのだからね。」

「だが、そのくさはパンの木にゆいつけてあるのだろう。」と、詩人はいいました。「そのかわりくらしの心配はいらないのだ。年をとれば、恩給がもらえるしな。」

「やはりなんといつても、きみのほうがいいくらしをしているよ。」と、書記がいました。「うちにすわって詩を書いているというのは、楽しみにちがいない。それで世間からはもてはやされ

る。おれはおれだでやっていける。まあ、きみ、いちどためしにやってみたまえ。こまごました役所のしごとに首をつつこんでいるということが、どんなことだかわかるから。」

詩人はあたまをふりました。書記も同様にあたまをふりました。てんでにじぶんじぶんの意見をいい張って、そのままふたりは別れました。

「どうも詩人というものはきみようなかまだな。」と、書記はおもいました。「わたしもああいいう人間の心持になってみたいものだ。じぶんで詩人になってみたいものだ。わたしなら、むろん、あの連中のように泣言をならばはしないぞ……ああ、詩人にとつてなんてすばらしい春だろう。あんなにも空気は澄み、雲はあく

までうつくしい。わか葉の緑にかおりただよう。そうだ、もうな
ん年にも、このしゅんかんのような氣持をわたしは知らなかった
。

これで、もうこの書記は、さつそく、詩人になっていたことが
わかります。べつだん目につくほどのことはありません。いった
い詩人とほかの人間とでは、生まれつきからまるでちがっている
ようにかんがえるのは、ばかげたことです。ただの人で詩人と名
のつていたいといの人間よりも、もっと詩人らしい氣質の人が
いくらかあるのです。ただまあ詩人となれば、おもったこと感じ
たことをよくおぼえていて、それをはつきりと、言葉に書きあら
わすだけの天分がある、そこらがちがうところです。でも、世間

なみの気質から詩人の天分にうつるというのは、やはり大きなわり方にちがいないので、それをいま、この書記君がしているのです。

「なんとすばらしい句だ。」と、書記はいいました。「ローネおばさんのすみれの花をおもい出させる。そう、あれはわたしのこどものじぶんだった。はてね、ながいあいだおもいだしもしずにいたのだがな。いいおばさんだったなあ。おばさんは取引所のうしろに住んでいた。いつも木の枝か青いわか枝をだいじそうに水にさして、どんな冬の寒いときでも、あたたかいへやのなかにおいた。ほっこりとすみれが花をひらいているわきで、わたしは凍った窓ガラスに火であつくした銅貨をおしつけて、すきみの穴を

こしらえたものだ。あれはおもしろい見物だった。そとの掘割には船が氷にとじられていた。乗組はみんなどこかへいつていて、からすが一羽のこつてかあかあないていた。やがて春風がそよそよ吹きそめると、なにかが生き生きして来た。にぎやかな歌とさけび声のなかに、氷がこわされる。船にタールがぬられて、帆綱のしたくができると、やがて知らない国へこぎ出していつてしまう。でも、わたしはいつまでもここにのこつている。年がら年じゅう警察のいすに腰をかけて、ひとが外国行の旅券を受け取っていくのをながめている、これがわたしの持つてうまれた運なのだ。うん、うん、どうも。」

こうおもつて、書記はふかいたため息をつきましたが。ふと、気

がついて、

「はて、おかしいぞ。わたしは、いったいどうしたというのだらう。いつもこんなふうに、かんがえたり感じたりしたことはなかったのに。きつと心のなかに春風が吹き込んだのかな。なにかやるせないようで、そのくせいい気持だ。」

こうおもいながらなにげなくかくしのなかの紙に手をふれました。「いけない。これがせつかくのかんがえをほかにむけさせるのだ。」書記はそういいながらはじめの一枚にふと目をさらしますと、それはこう読まれました。「『ジグブリット夫人、五幕新作悲劇』おやおや、これはなんだ。しかもこれはわたしの手だぞ。わたしはいつこんな悲劇ひげきなんて書いたろう。軽喜歌劇散歩道の陰

謀 一名懺悔祈祷日。はてね、どこでこんなものをもらつたろう。たれかいたずらに、かくしに入れたかな。おやおや、ここに手紙があるぞ。」

いかにもそれは劇場の支配人から来たものでした。あなたのお作は上場いたしかねますと、それもいつこう札をつくさない書きぶりで書いてありました。

「ふん、ふん。」こう書記はつぶやきながら、腰掛に腰をおろしました。なにか心がおどつて、生きかえつたようで、気分がやさしくなりました。ついすぐそばの花をひとつ手につみました。それはつまらない、ちいさなひなぎくの花でした。植物学者が、なんべんも、なんべんも、お講義を重ねて、やつと説明することを、

この花はほんの一分間に話してくれました。それはじぶんの生いたちの昔話もしました。お日さまの光がやわらかな花びらをひらかせ、いい句を立たせてくださる話もしました。そのとき、書記は、「いのちのたたかい」ということを、ふとおもいました。これもやはりわたしたちの心を動かすものでした。

空気と光は花と仲よしでした。それでも光がよけいすきなので、いつも光のほうへ、花は顔をむけました。ただ光が消えてしまつたとき、花は花びらをまるめて、空気に抱かれながら眠りました。「わたしを飾ってくれるのは、光ですよ。」と、花はいいました。「でも、空気はおまえに息をさせてくれるだろう。」と、詩人の声がささやきました。

すると、すぐそばに、ひとりの男の子が、溝川どぶかわの上を棒でたたいていました。にぎった水のしずくが緑の枝の上にはねあがりました。すると、書記はそのしずくといっしょにたかく投げあげられたなん万という目にみえないちいさい生き物のことをおもいました。それは、からだの大きさの割合からすると、ちょうどわたしたちが雲の上まで高く投げられたと同じようなものでしょうか。そんなことを書記はおもいながら、だんだんかわっていくじぶんをおかしく感じました。

「どうも眠って夢をみているのだな。だが、ふしぎなことにはちがいない。そんなにまざまざ夢をみていて、しかも夢のなかで、それが夢だと知っているのだからな。どうかして夢にみたことを

のこらず、あくる日目がさめてもおぼえていられたらいいだろう。どうもいつもとちがつて、気分がみようにうかれている。なにをみてもはつきりわかるし、生き生きとものをかんじている。でも、あしたになっておもいだしたら、ずいぶんばかっているにちがいない。せんにもよくあつたことだ。夢のなかでいろいろと賢いことやりっぱなことをいったり、きいたりするものだ。それは地の下の小人の金こびと きんのようなものだ。それを受けとったときには、たくさんできれいな金にみえるが、あかるい所でみると、石ころか枯ツ葉になつてしまう。やれ、やれ。」

書記は、さもつまらなそうにため息をついて、枝から枝へ、愉快そうにとびまわつて、ちいちいさえずっている小鳥をながめま

した。

「小鳥はわたしよりずっとよくくらしている。とぶということは、なにしろたいしたわざだ。つばさをそなえてうまれたものはしあわせだ。そうだな。わたしがもしなにか人間でないものになれるならかわいいひばりになりたいものだ。」

こういうが早いか、書記の服のせなかに、両そでがびつたりくつついて、つばさになりました。着物は羽根になり、うわおいぐつはつめになりました。書記はじぶんのずんずん変っていくすがたをはつきりみながら、心のなかでわらいました。「なるほど、これでいよいよ夢をみていることがわかる。だが、わたしはまだこんなおもいきってばかげた夢をみたことはないぞ。」こういつ

て、ひばりになった書記は、みどりの枝のなかをとびまわってう
たいました。

もう、その歌に詩はありません。詩人の気質はなくなってしまう
ったのです。このうわおいぐつは、なんでもものごとをつきつめ
てするひとのように、一――^じ時にひとつのことしかできません。詩
人になりたいというと、詩人になりました。こんどは小鳥になり
たいというと、小鳥になりました。とたんに詩人の心は消えまし
た。

「こいつは実におもしろいぞ。」と、書記はとびながら、なおか
んがえつつづけました。「わたしは昼間、役所につとめて、石のよ
うに堅い椅子に腰をかけて、おもしろくないといって、およそこ

の上ない法律書類のなかに首をつツこんでいる。夜になると夢をみて、ひばりになつて、フレデリクスベルグ公園の木のかなかとびまわる。こりやあ、りっぱに大衆喜劇の種^{たね}になる。」

そこで、書記のひばりは草のなかに舞いおりて、ほうぼうに首をむけて、草の茎をくちばしでつつきました。それはいまのじぶんの大きさにくらべては、北アフリカのしゅろの枝ほどもありそうでした。

すると、だしぬけにまわりがまっ暗やみになつてしまいました。なにか大きなものが、上からかぶさつて来たようにおもわれました。これはニュウボデルから来た船員のこどもが、大きな帽子を小鳥の上に投げかけたものでした。やがて下からぬつと手はい

って来て、書記のひばりのせなかとつばさをひどくしめつけたので、おもわずぴいぴい鳴きました。そして、びっくりした大きな声で「このわんぱく小僧め、おれは警察のお役人だぞ。」とどなりました。けれどもこどもには、ただぴいぴいときこえるだけでした。そこでこの男の子は鳥のくちばしをたたいて、つかんだままほうぼうあるきまわりました。

やがて、なみきみち並木道で、男の子はほかのふたりのこどもに出あいました。身分をいう人間の社会では、いい所のこどもというのですが、学校では精神がものをいうので、ごく下の級に入れられていました。このこどもたちが、シリング銀貨二、三枚で小鳥を買いました。そこで、ひばりの書記は、またコペンハーゲンのゴー

テルス通のある家へつれてとられることになりました。

「夢だからいいようなのだが。」と、書記はいいました。「さもなくば、おれはほんとうにおこつてしまう。はじめに詩人で、こんどはひばりか。しかもわたしを小鳥にかえたのは、詩人の氣質がそうしたのだよ。それがこどもの手につかまれるようになっては、いかにもなさない。このおしまいはいったいどうなるつもりか、見当がつかない。」

やがて、こどもたちはひばりをたいそうりっぱなおへやにつれこみました。ふとつたにこにこした奥さまが、こどもたちをむかえました。この子たちのおかあさまでしたらう。けれども、このおかあさまは、ひばりのことを「下等な野そだちの鳥」とよんで、

そんなものをうちのなかへ入れることをなかなかしようちしてくれません。やつとたのんで、ではきょう一日だけということでも許してもらえました。で、ひばりは窓のわきにある、からツぽなごのなかに入れられなければなりませんでした。「おうむちゃん、きつと、うれしがるでしょうよ。」と、奥さまはいつて、上のきれいなしんちゅうのかごのなかの輪で、お上品ぶつてゆらゆらしている大きなおうむにわらいかけました。

「きょうはおうむちゃんのお誕生日だったねえ。」と、奥さまはあまやかすようにいいました。「だから、このちつぽけな野そだちの鳥もお祝をいいに來たのだろうよ。」

おうむちゃんはこれにひとことも返事をしませんでした。ただ

お上品ぶってゆらゆらしていました。すると、去年の夏、あたたかい南の国のかんばしい林のなかから、ここへつれてこられた、かわいらしいカナリヤが、たかい声で歌をうたいはじめました。「やかましいよ。」と、奥さまはいいました。そうして白いハンケチを鳥かごにかけてしまいました。

「ぴい、ぴい。」と、カナリヤはため息をつきました。「おそろしい雪おろしになって来たぞ。」こういつてため息をつきながら、だまってしまいました。

書記は、いや、奥さまのおつしやる下等な野そだちの鳥は、カナリヤのすぐそばのちいさなかごに入られました。おうむからもそう遠くはなれてはいませんでした。このおうむちゃんのしや

べれる人間のせりふはたったひとつきり、それは、「まあ、人になることですよ。」というので、それがずいぶんとぼけてきこえるときがありました。そのほかに、ぎやあぎやあいうことは、カナリヤの歌と同様、人間がきいてもまるでわけがわかりませんでした。ただ書記だけは、やはり小鳥のなかまにはいったので、いうことはよくわかりました。

「わたしはみどりのしゅろの木や、白い花の咲くあんずの木の下をとんでいたのだ。」と、カナリヤがうたいました。「わたしは男のきょうだいや女のきょうだいたちと、きれいな花の咲いた上や、鏡のようにあかるいみどりの上をとんでいたのだ。みずうみの底には、やはり草や木が、ゆらゆらゆられていた。それからず

いぶん、ながいお話をたくさんしてくれるきれいなおうむさんにもあった。」

「ありや野そだちの鳥よ。」と、おうむがこたえました。「あれらはなにも教育がないのだ。まあ人になることですよ。おまえ、なぜわらわない。奥さんやお客さんたちがわらったら、おまえもわらう。娯楽に興味をもたないのは欠点です。まあ人になることですよ。」

「おまえさん、おぼえているでしょう。花の咲いた木の下に、天幕を張って、ダンスをしたかわいらしいむすめたちのことを、野に生えた草のなかに、あまい実がなつて、つめたい汁の流れていることを。」

「うん、そりや、おぼえている。」と、おうむがこたえました。

「だが、ここのお内で、ぼくはもつといいくらしをしているのだ。ごちそうはあるし、だいじに扱われている。この上のもぞみはないのさ。まあ、人になることですよ。きみは詩人のたましいとかいうやつをもっている。ぼくはなんでも深い知識ととんちをもっている。きみは天才はあるが、思慮しりよがないよ。持つてうまれた高調子で、とんきようにやりだす、すぐ上からふろしきをかぶされてしまうのさ。そこはぼくになるとちがう。どうしてそんな安ッぽいのじゃない。この大きなくちばしだけでも、威厳いげんがあるからな。しかもこのくちばしで、とんちをふりまいて人をうれしからせる。まあ、人になることですよ。」

「ああ、わがなつかしき、花さく熱帯の故国よ。」とカナリヤがうたいました。「わたしはあのみどりしたたる木立と、鏡のような水に枝が影をうつしている静かな入江をほめたたえよう。『沙^さ漠^{ばく}の泉の木』が茂って、そこにうつくしくかがやくきようだいの鳥たちのよろこびをほめたたえよう。」

「さあ、たのむから、もうそんなさけない声を出すのはよしておくれ。」と、おうむがいました。

「なにかわらえるようなことをうたっておくれ。わらいはいとも高尚な心のしるしだ。犬や馬がわらえるかね。どうだ。どうして、あれらはなくだけです。わらいは人にだけ与えられたものだ。ほッほッほ。」

こうおうむはわらってみせて、「まあ、人になることですよ。」とむすびました。

「もし、もし、そこに灰色しているデンマルクの小鳥さん。」と、カナリヤがひばりに声をかけました。「きみもやはり囚^{しゅうじん}人になつたんだな。なるほど、きみの国の森は寒いだろう。だが、そこにはまだ自由がある。とびだせ。とびだせ。きみのかごの戸はしめるのを忘れている。上の窓はあいているぞ。逃げろ、逃げろ。」

カナリヤがこういうと、書記はついそれにのつて、すうとかどをとびだしました。そのとたん、となりのへやの、半分あいた戸がぎいと鳴ると、みどり色した火のような目の飼いねがしのん

で来ました。そうして、いきなりひばりを追っかけようとしまして、カナリヤはかごのなかをとびまわりました。おうむもつばさをばさばさやって「まあ、人になることですよ。」とさけびました。書記は、もう死ぬほどおどろいて、窓から屋根へ往来へにげました。とうとうくたびれて、すこし休まなければならなくなりました。

すると、むこうがわの家が、住み心地のよさそうなようすをしていました。窓がひとつあけてあったので、そこからつういととび込むと、そこはじぶんのへやの書斎でした。ひばりはそのつくえの上にとびおりました。

「まあ、人になることですよ。」と、ひばりはついおうむの口ま

ねをしていました。そのとたんに、書記にもどりました。ただつくえの上にのっかっていました。

「やれ、やれおどろいた。」と、書記はいいました。「どうしてこんな所にのっかっているのだろう。しかもひどく寝込んでしまつて、なにしろおちつかない夢だった。しまいまで、くだらないことばかりで、じょうだんにもほどがある。」

六 うわおいぐつのさずけてくれたいちばんいい事

明くる日、朝早く、書記君まだ寢床にはいつていますと、戸をこつこつやる音がきこえました。それはおなじ階でおとなり同士の若い神学生で、はいつて来てこういいました。

「きみのうわおいぐつを貸してくれたまえ。」と、学生はいいました。「庭はひどくしめっているけれど、日はかんかん照っている。おりていって、一服やりたいとおもうのだよ。」

学生にうわおいぐつをはいて、まもなく庭へおりました。庭にはすももの木となしの木がありました。これだけのちよつとした



庭でも、都のなかではどうして大したねうちです。

学生は庭の小みちをあちこちあるきまわりました。まだやつと六時で、往来には郵便馬車のラッパがきこえました。

「ああ、旅行。旅行。」と、学生はさけびました。「これこそ、この世のいちばん大きな幸福だ。これこそぼくの希望のいちばんたかい目標だ。旅に出てこそぼくのこの不安な気持ちが落ちつく、だが、ずっととおくではなければなるまい。うつくしいスウイスがみたい。イタリアへいきたい——」

いや、うわおいぐつがさつそくしるしをみせてくれたことは有りがたいことでした。さもないと、じぶんにしても、他人のわたしたちにしても、始末のわるい遠方までとんでいってしまうところ

ろでした。さて、学生は旅行の途中です。スウイスのまんなかで、急行馬車に、ほかの八人の相客といっしよにつめこまれていました。頭痛がして、首がだるくて、足は血が下がってふくれた上を、きゆうくつな長ぐつでしめつけられていました。眠っているとも、さめているともつかず、うとうとゆられていました。右のかくしには信用手形を入れ、左のかくしには、旅券を入れていました。アイドル金貨が胸の小さな革紙入にぬい入れてありました。うとうとするとこのだいじな品物のうちどれかをなくした夢をみました。それで、熱のたかいときのように、ひよいととびあがりました。そうしてすぐと手を動かして、右から左へ三角をこしらえて、それから胸にさわってまだなくさずに持っているかどうかみ

ました。こうもりがさと帽子とステッキは、あたまの上の網のなかでゆれてぶら下がっていて、せつかくのすばらしいその景色をみるじやまをしていました。でも、その下からのぞいてみるだけにして、そのかわり学生は心のなかで、詩人とまあいつてもいいでしょう、わたしたち知っているさる人が、スウイスで作って、そのまままだ印刷されずにいる詩をうたっていました。

さなり、ここに心ゆくかぎりの美はひらかれ

モンブランの山天あまそそる姿をあらわす。

囊のうちゆう

中のかくもすみやかに空しからずば、はや

あわれ、いつまでもこの景にむかいいたらまし。

みるかぎりの自然に、大きく、おごそかで、うすぐらくもみえました。もみの木の林が、高い山の上で、草やぶかなんぞのようくもきりにみえました。山のいただきは雲霧にかくれてみえませんでした。やがて雪が降りはじめて、風がつめたく吹いて来しました。

「おお、寒い。」と、学生はため息をつきました。「これがアルプスのむこうがわであつたらいいな。あちらはいつも夏景色で、その上、この信用手形でお金が取れるのだろうが。金の心配で、せつかくのスウイスも十分に楽しめない。どうかはやくむこうへいきたいなあ。」

こういうと、もう学生は山のむこうがわのイタリアのまんなか

の、フィレンツェとローマのあいだに来ていました。トラジメーネのみずうみは、夕ばえのなかで、暗いあい色の山にかこまれながら、金色のほのおのようにかがやいていました。ここは昔、ハシニバルがフラミウスをやぶったところで、そこにぶどうのつるが、みどりの指をやさしくからみあっていました。かわいらしい半裸体のこどもらが、道ばたの香り高い月桂樹げっけいじゆの林のなかで、まっ黒なぶたの群を飼っていました。もしこの景色をそのまま画にかいてみせることができたなら、たれだつて「ああ、すばらしいイタリア。」とさげばずにはいられないでしょう。けれどもさしあたり神学生も、おなじウエツラ（四輪馬車）にのりあわせた旅の道づれも、それをくちびるにのせたものはありませんでした。

毒のあるはえやあぶが、なん千となく、むれて馬車のなかへとびこんで来ました。みんな気持ちがいのように、ミルテの枝をふりまわしましたが、はえはへいきで刺しました。馬車の客は、ひとりだつてさされて顔のはれあがらないものはありませんでした。かわいそうな馬は腐れ肉でもあるかのようにはえのたかるままになつていました。たまにぎよ者がおりて、いっぱいたかつている虫をはらいのけると、そのときだけいくらかほつとしました。いま、日は沈みかけました。みじかい、あいだですが、氷のような冷やかさが万物にしみとおつて、それはどうにもこころよいものではありません。でも、まわりの山や雲が、むかしの画にあるような、それはうつくしいみどり色の調子をたたえて、いかにもあ

かるくすみとおつて——まあなんでも、じぶんでいつてみることで、書いたものをよむだけではわかりません。まったくたたとえばうのないけしきです。この旅行者たちたれもやはりそうおもいました。でも——胃^いの腑^ふはからになつていましたし、からだも疲れきつていました。ただもう今夜のとまり、それだけがたれしもの心のねがいでした。さてどうそれがなるのか。うつくしい自然よりも、そのほうへたれの心もむかつていました。

道は、かんらの林のなかを通つていきました。学生は、故郷にいて、節だらけのやなぎの木のあいだをぬけて行くときのような気もちでした。やがてそこにさびしい宿屋をみつけました。足なえのこじきがひとかたまり、その入口に陣取っていました。

なかでいちばんす早いやつでも、ききんの惣そうりよう領息子が丁年になつたような顔をしています。そのほかは、めくらかいざりかどちらかでしたから、両手ではいまわるか、指の腐れおちた手をあわせていました。これはまつたくみじめがぼろにくるまつて出て来た有様でした。*「エチエレンツア・ミゼラビリ」と、こじきはため息まじりにかたわな手をさしました。なにしろこの宿屋のおかみさんからして、はだしでくしを入れないぼやぼやのあたまに、よごれくさったブルーズ一枚でお客を迎えました。戸はひもでくくりつけてありました。へやのゆかは煉瓦れんがが半分くずれた上を掘りかえたようになっていさいでした。こうもりが天てんじよう井の下をとびまわって、へやのなかから、むつとくさいにおいがし

ました――。

＊旦那さま、可愛いそうなのでございます。

「そうだ、いつそ食卓はうまやのなかにもちだすがいい。」と、旅人のひとりがいいました。「まだしもあそこなら息ができそうだ。」

窓はあけはなされました。そうすればすこしはずしい風がはいつてくるかとおもったのです。ところが風よりもつとす早く、かつたいぼうの手がでて来て、相変らず「ミゼラビリ・エチエレンツア」と鼻をならしつづけました。壁のうえにはたくさんちくが樂らくが書きがしてありましたが、その半分は＊「ベルラ・イタリア」にはんたいなことばかりでした。

*イタリヤよいとこ。

夕飯ができました。それはこしようと、ぷんとくさい脂で味をつけた水っぽいスープとでした。そのくさい脂がサラダのおもな味でした。かびくさい卵と、鶏冠とさかの焼いたのが一とうのごちそうでした。ぶどう酒しゅまでがへんな味がしました。それはたまらないまぜものがしてありました。

夜になると、旅かばんをならべて戸に寄せかけました。ほかのものねているあいだ、旅人のひとりが交代で起きて夜番をすることになりました。そこで神学生がまずその役にあたりました。ああ、なんてむんむんすることか。暑さに息がふさがるようにでした。蚊かがぶん、ぶん、とんで来て刺しました。おもての「ミゼラビリ」

は夢のなかでも泣きつづけていました。

「そりや旅行もけつこうなものさ。」と、神学生はいいました。

「人間に肉体というものがなければな。からだは休ましておいて、心だけとびあるくことができたらいいさ。どこへいつてもぼくは心をおされるよう不満にであう。ぼくのものぞんでいたのは、現在の境遇より少しはいいものなのだ。そうだ、もう少しいいもの、いちばんいいものだ。だが、それはどこにある。それはなんだ。心のそこには求めているものがなにかよくわかっている。わたしは幸福を目あてにしたいのだ。すべてのもののなかでいちばん幸福なものね。」

すると、いうがはやいか、学生は、もうじぶんの内へかえつて

いました、長い、白いカーテンが窓からさがっていました。そうしてへやのまんなかに、黒い棺かんがおいてありました。そのなかで、学生は死んで、しずかに眠っていたのです。のぞみははたされたのです——肉体は休息して、精神だけが自由に旅をしていました。「いまだ墓にいらざるまえ、なにびとも幸福というを得ず。」とは、ギリシアの賢人ソロンの言葉でした。ここにそのことばが新しく証明されたわけです。

すべて、しかばねは不死不滅のスフィンクスです。いま目のまえの黒い棺かんのなかにあるスフィンクスも、死ぬつい三日まえ書いた、次のことばでそのこたえをあたえているのです。

いかめしい死よ、おまえの沈黙は恐怖をさそう。

おまえの地上にのこす痕跡あとは寺の墓場だけなのか。

たましいは*ヤコブのはしごを見ることはないのか。

墓場の草となるほかに復活の道はないのか。

この上なく深いかなしみをも世間はしばしばみすごしている。

おまえは孤独のまま最後の道をたどっていく。

しかもこの世にあって心の荷になう義務はいやが上に重い、

それは棺の壁をおす土よりも重いのだ。

* ヤコブがみたという地上と天国をつなぐはしご

(創世記二八ノ一二)

ふたつの姿がへやのなかでちらちら動いていました。わたしはふたりとも知っています。それは心配の妖女ようじよと、幸福の女神の召使でした。ふたりは死人の上にのぞきこみました。

心配がいました。「ごらん、おまえさんのうわおいぐつがどんな幸福をさずけたでしょう。」

「でも、とにかくここに寝ている男には、ながい善福をさずけたではありませんか。」と、よろこびがこたえました。

「まあ、どうして。」と、心配がいました。「この人はじぶんで出て行ったので、まだ召されたわけではなかったのですよ。この人の精神はまだ強さが足りないのです、当然掘り起さなければならぬはずの宝を掘り起さずにしまいました。わたしはこの人に

好いことをしてやりましょう。」

こういつて、心配は学生の足のうわおいぐつをぬがしてやりました。すると、死の眠がおしまいになって、学生は目をさまして立ちあがりました。心配の姿は消えました。それといっしょにうわおいぐつも消えてなくなりました。——きつと心配が、そのうちそれをじぶんの物にして、もっているのでしょうか。



青空文庫情報

底本：「新訳アンデルセン童話集第一巻」同和春秋社

1955（昭和30）年7月20日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

※底本中、*で示された語句の訳註は、当該語句のあるページの下部に挿入されていますが、このファイルでは当該語句のある段落のあとに、5字下げで挿入しました。

※疑問箇所の確認にあたっては、「アンデルセン童話集」 一本

足の兵隊」富山房百科文庫、富山房、1938（昭和13）年12月10日

発行を参照しました。

入力：大久保ゆう

校正：秋鹿

2006年1月18日作成

2009年9月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

幸福のうわおいぐつ

LYKKENS KALOSKER

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 ハンス・クリスティアン・アンデルセン Hans Christian Andersen

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>